

**塩尻和子編著『リビアを知るための60章』【第2版】  
(エリア・スタディーズ59) (明石書店、2020年)**

岩崎真紀

**1. 本書出版の背景 —— 「アラブの春」とリビア**

本書は中東の地中海沿岸に位置するリビア（リビア国, State of Libya）に関する概説書である。編者である塩尻和子氏は2006年に単著『リビアを知るための60章』（エリア・スタディーズ59）を出版し、本書はその第2版である。初版から第2版出版までの約14年のあいだに、リビアは大きな転換期を迎えた。2011年に「民衆蜂起」が起こり、42年間にわたって同国を支配したムアンマル・アル・カッザーフィー（カダフィー）（1942-2011）が殺害された結果、リビア社会は今（2020年10月）もつづく内戦状態に陥ったのである。2010年12月にチュニジアから始まった中東における一連の民衆蜂起、いわゆる「アラブの春<sup>1</sup>」がこの地域の多くの国々に政治体制や社会状況の急激な変化をもたらすなか、リビアはひととき大きな影響を受けたのだった。

編者は中世イスラーム神学を専門とする研究者だが、初版において現代を中心としたリビアに焦点をあてた背景には、本書の共著者でもある氏の配偶者の塩尻宏氏が駐リビア特命全権大使に任命され、2003年6月から2006年3月までの2年9ヶ月のあいだ首都トリポリに駐在したことがある。編者はこの期間、毎年通算約3ヶ月間トリポリに滞在して現地調査を行い（8頁）、その成果を本書初版としてまとめた。その後、2011年のカッザーフィー政権崩壊とそれに伴うリビア社会の大変動がきっかけとなり、共著者に元外交官の塩尻（宏）氏、現代リビア研究者の上山一氏、田中友紀氏、リビア人のアメッド・ナイリ氏（研究者／外交官）、インティサル・ラジャバーニ氏（国際機関職員）、ハーテム・ムスタファ氏（研究者／政治家）の6名を迎え、構想から9年の歳月を経て本書を出版するに至った。

**2. 初版との違いからみる本書の構成**

本書と初版とのおもな共通点と相違点はつぎのとおりである。まず、章の数はどちらも60だが、初版が全339頁、6部構成、コラム12本であるのに対し、本

書は全 382 頁、9 部構成、コラム 23 本で、全体的に分量が増加している。とくにリビア人やリビア研究者が共著者として加わった本書では現地情勢の詳細が増えた。内容に関しては、本書の第I, III, V, VI部は、初版に掲載されたカッザーフィーの政治思想の詳細が削除され、多少の訂正・加筆がなされたほかは、ほぼ変化はない。初版の「資料・カッザーフィーの演説」(和訳)は本書には所収されていない。他方で「はじめに」の大部分、第II部前半、第IV, VII, VIII, IX部、巻末の「新生リビア政権の系譜」は新たに書き下ろされた。

### 3. 各部の概要

第I部では、リビアの地理、歴史、民族が紹介される。第1章では、アフリカ大陸で4番目に広い国土が、1770 キロメートルという地中海沿岸諸国のなかでもっとも長い海岸線、国土全体の約 93 パーセントを占める沙漠、点在する高原、オアシス、湿地帯、湖などから成る様子が生き生きと描写される (26-30 頁)。

第2章から第10章では、ユネスコの世界遺産にも登録されている古代遺跡の現状に触れつつ、古代から 1951 年の独立までのリビアの歴史や現代リビアの民族、言語が論じられる。なかでもひととき目を引くのは独立までの歴史で、地中海沿岸地域は紀元前 2000 年頃のフェニキア人の入植に始まり、ローマ帝国、バンダル人、ビザンティン、アラブ、スペイン、オスマン帝国、イタリアなどの外国勢力によりほぼ常に支配されてきた (31 頁)。それに対して、内陸部は遊牧民族の土地であり (31 頁)、その伝統は近現代のリビア人に大きな影響を与えている。

第II部では 2011 年に起きた民衆蜂起とその結果としてのカッザーフィーの死が論じられたのち、カッザーフィーの生涯が紐解かれる。ここではカッザーフィーの人物像とその死に焦点をあてる。

カッザーフィーは 1942 年 (1940 年もしくはそれ以前という説もある) にスルト (シルテ) の南方の沙漠に暮らす遊牧民の部族カッザードファー族に属する 6 人家族のもとで育った (105-106 頁)。非識字者も多い遊牧民のなかにあって、カッザーフィーは通学する機会に恵まれ、勉学にも優れていた一方、遊牧民の伝統への愛着も終生変わることはなかった (106-107 頁)。

彼の幼少期は第2次世界大戦の時期にあたり、リビアの地中海沿岸ではドイツとイギリスが激しい戦闘を繰り返していた (107 頁)。編者はこの時代に彼の「潜在意識のなかに、イタリア、ドイツの枢軸側だけでなく、イギリスやアメリカなどの外国勢力に対する嫌悪感、反帝国主義感情などが植え付けられたのかもしれない」と推測する (106 頁)。

イスラームの聖典クルアーンと隣国エジプトの大統領ガマル・アブドゥン・ナーセル（在任 1956-70）から大きな影響を受けたカッザーフィーは早熟で、中学生のころから政治活動に参加した。その後陸軍大尉となった彼は 1969 年、若干 27 歳のときに革命を成功させた（110 頁）。そして、ジャマーヒーリーヤ体制という独自の社会主義体制のもと欧米列強を敵視する政策を掲げ、42 年間にわたり最高指導者としてリビアを支配した。ジャマーヒーリーヤとは、アラビア語で「大衆」を意味するジュムフルの複数形ジャマーヒールを変化させた語で、大衆集団による国家または体制を意味するカッザーフィーの造語である（104 頁）。しかし、編者によれば、この制度は「容易に独裁が生じやすい構造」（92 頁）であるため、多くの民衆はカッザーフィーの支配が長期にわたりつづくなかで徐々に反発を覚えるようになり、最終的に強い憎しみを抱くようになった彼らは、カッザーフィーを失脚させただけでなく、殺害するに至った。

第Ⅲ部では、リビアと欧米諸国や日本との国家間関係が論じられるとともに、7 年間つづいた国連制裁が解除されたのち、2003 年にリビアが公式に国際社会復帰を宣言したことで、欧米諸国や日本の人々がリビア人との関係構築に向けて奮闘する様子が描かれる。

編著者たちのリビア滞在経験のなかで評者がとくに興味深く読み進めたのは、この部に掲載されている「コラム 6 女性たちの革命記念日」（128-133 頁）である。2005 年のある日、編者は大使公邸でリビアの儀典局から電話を受ける。2 日後のカッザーフィー夫人主催の革命記念日晩餐会に招待するという。開始時間も会場も当日まではっきりしなかった。また、残念ながら本書には収録されていないが、初版の「コラム 5 シルテの記念行事：行先も告げられずに」での塩尻（宏）氏の体験はさらに興味深い。氏は 2004 年に革命記式典に招待されたのだが、前日の夜 9 時に大使館宛のファックスで連絡がきたため、気づいたのは当日朝だった。場所はトリポリから約 500 キロメートルも離れたカッザーフィーの生まれ故郷に近いスルトだという。会場の詳細な位置も分からないまま、リビア政府が準備した航空機やバスを乗り継ぎ、数時間かけて到着した。公式行事であるにもかかわらず、最初の集合場所だけ伝えられ、その後は、目的地も、行事の内容も、終了時間もほとんど分からないまま、リビア側に「護送」された経験について、塩尻（宏）氏は「数十人と一緒なので、不安感は少ないが、招待されたのがたった 1 人であつたら、と思うと笑い話にはならない」と回想する。

事前に開催場所を告知しないのは、暗殺未遂経験のあるカッザーフィーや夫人の身辺警護が 1 つの理由として考えられるが、リビアと外交やビジネスの関係を築きたい欧米諸国や日本にとっては、それがなかなか困難な道であることをこれ

らの逸話は示しているともいえる。本書ではそれについて、「押し寄せる欧米勢力も、いったん、リビア国内に入ってみると、ジャマーヒーリーヤという特異な政治思想が組み込まれた政治システムと、長く国際社会から隔離されてきた間に定着した非合理的な手続き、命令伝達や指揮系統の不透明さなどに、たちまち戸惑ってしまうようであった」と指摘している（134頁）。

第IV部では、リビアに流入する移民や難民の増加をめぐる問題が論じられる。アフリカの盟主を目指したカッザーフィー政権は、アフリカ出身者の入国ビザを免除した。このためとくにサハラ以南のアフリカ諸国からの移民が増加したものの、2003年の国際社会復帰以降、EU諸国に協力した同政権は不法移民を厳しく取り締まるようになった。さらに「アラブの春」による中東諸国の不安定化やアフリカ諸国の経済悪化などが重なり、リビア経由でヨーロッパへ向かう移民・難民が増加した。これにより、密航の失敗による溺死、リビア国内の収監施設での虐待などの問題が生じている（165-166頁）。また、普通の暮らしを送っている移民・難民のあいだでも、雇用主からの暴力や賃金不払いなどの人権侵害、民兵による攻撃、強盗、殺害などの被害が多数報告されている（172頁）。

第V部では一転してリビアの社会や文化が論じられる。リビア国民の95パーセント以上はスンナ派ムスリムである（182頁）。リビアで影響力を持つスンナ派法学派のマーリーキー派は保守的なことで知られており、飲酒も喫煙も禁じている。しかし、編者によれば、カッザーフィー政権下のトリポリ市内ではタバコは販売されており、酒類は販売こそないものの、禁じられているはずの外国からの持ち込みに対しては、それほど厳格に検査がなされているわけではなかったという（186頁）。また、この部では、食文化、教育制度、女性の社会進出など、市井の人々の生活に関わる事柄が編者の豊かな現地体験をもとに詳細に論じられる。

第VI部ではリビアが有する天然資源や日本との関係に焦点があてられる。編者によれば、リビアは国際的にみても高品質の原油を算出する数少ない産油国であり、世界第10位の埋蔵量を持つだけでなく、国土の70パーセント以上を占める未開発地域にも石油や天然ガスが潜んでいる可能性がある（218頁）。リビアで石油が発見されたのは1959年のことで、69年に政権を掌握したカッザーフィーは欧米メジャーによる支配を退け、原油価格の40パーセント近い値上げ、国有化を宣言した。しかし、経済制裁が相次いだため、1970年代には330万バレルだった1日当たりの産出量は、2006年には170万バレルと落ち込み、さらに内戦により25万バレルまで落ち込んだ（219-220頁）。現在の内戦下では、資金源確保を目指す政権や武装組織が石油施設の管理権をめぐり緊張状態にある（234頁）。

第VII部から最後の第IX部までは2011年から2019年末までの約10年のあいだ

に起きた民衆蜂起、独裁政権の崩壊、新生リビアの誕生と混乱が時系列順に論じられる。まず第Ⅶ部において民衆蜂起と内戦、そしてカッツァーフィー政権の崩壊の様子が記される。第Ⅱ部前半がほぼ同様の内容を大局的に論じたのに対し、ここでは細かな出来事にも目が向けられる。

第Ⅷ部では暫定政府の成立とその後の混乱の様子が「新生リビアの生みの苦しみ」(267 頁)として描かれる。2011 年 3 月に反カッツァーフィー派(以下反政権派)により発足した国民評議会は国連総会でも承認され、2012 年 7 月にリビア初の自由国政選挙が実施された。選挙自体は概ね順調に実施され、11 月には移行内閣が発足したものの、部族や民兵組織間の衝突、国際機関や政府機関への攻撃がつづき、治安は悪化の一途をたどる(291-293 頁)。そのなかで、かつてカッツァーフィーにより失脚させられ、20 年近くアメリカでの生活を余儀なくされたハーリーファ・ハフタル将軍(1943-)が台頭する。アメリカ国防省諜報部や CIA と緊密な関係を持つこの人物は 2011 年の民衆蜂起を機に帰国すると、2014 年 5 月に「リビア国民軍」(LNA)を組織し、反政権派としての存在感を高めた(315-317 頁)。

2014 年 6 月には国民議会に代わる代表議会の選挙が実施され、リベラル派勢力が多数の議席を獲得、イスラーム主義勢力は敗北する(318 頁)。しかし、代表議会の正当性を認めない旧国民議会議員が中心となり、「救国政府」(GNS)(2016 年以降は国民和解政府:GNA)をトリポリで発足させた(318-319 頁)。このことはリビアの政治・社会を分断させるのみならず、諸外国の介入も招いた。イスラーム主義勢力から構成される旧国民議会(トリポリ政府)をトルコやカタールが支援するのに対して、リベラル派勢力と連邦主義者から構成される代表議会(トブルク政府)を UAE やエジプトが支援しはじめたのである(319 頁)。

最後の第Ⅸ部では統一国家再建に向けたさまざまな政治勢力の動きが提示されるが、非常に複雑で混迷した現状に対して、ほとんどの読者が評者と同様に暗澹たる思いを抱くのではないだろうか。トリポリ政府とトブルク政府の対立、「イスラーム国」との戦い、利害関係から軍事介入する欧米・中東諸国の存在は、新生リビアの大きな足かせとなっている。また、旧政権で活躍した政治家や公務員が排除されることによる行政の停滞も国民の生活に大きな影響を与える(347-348 頁)。2019 年末までに実施すると発表されていた議会選挙と大統領選挙は実現されないままである(356 頁)。

さらに、今、リビア社会ではカッツァーフィーに代わるカリスマを求める声が挙がっているという。期待されている 1 人はカッツァーフィーから後継者とみなされていた次男のセイフ・アル・イスラームである(351 頁)。编者自身も講演を聞いたことがあり、「開明的な人材」(352 頁)だと感じたそうだが、「民主主義的な国

家づくりを希求して独裁者を排除したはず」(349頁)のリビア社会のなかで、「複雑に絡み合った混乱を收拾するために再び『カリスマ』の待望論が展開」(349頁)する様子は、独裁体制崩壊後の国家運営の難しさを物語っている。

#### 4. 本書の学術的意義

評者は現代エジプトの民衆の宗教実践を専門のひとつとする研究者だが、本書を一読して気づいたのが、その内容の幅広さと各部の充実度である。おそらく本書はリビアについて論じた邦文文献としては類書をみないものであり、極めて貴重な文献であろうと考える。近年でこそ中東研究者の数は増えつつあるが、そのなかでリビアを専門とする研究者はまだ数えるほどである。そのため、管見の限りリビアを専門とした邦文文献は少なく、とくに現代リビアの状況を論じた文献は本書と本書で紹介された参考文献以外にはあまり存在しない。したがって、日本の一般の人々がリビアの情報を得ようと思った場合、マスメディアによる報道にも依拠せざるを得ないわけだが、こちらに関しても、日本ではリビアを論じる報道は少なく、あったとしても近年ではテロや内戦のことがほとんどである。その結果、人々の頭のなかにはリビアに対する危険なイメージばかりが増幅される。評者が教鞭を執る大学でも、「中東＝危険な場所」というイメージしか持たない学生は非常に多い。このようにバイアスがかかった状況のなかで、リビアの豊かな歴史や文化、「誠実で大人しい」(81頁)、「心の優しさを失わない人々」(360頁)のことを、現地体験や多くの写真を交えて分かりやすく伝える本書は、リビアに対する最良の入門書である。

他方で、本書は専門的な内容にも踏み込んでいる。明石書店の「エリア・スタディーズ」シリーズは一般書に位置づけられているが、カッザーフィー政権崩壊後の刻々と変遷する国内政治や国際関係についての記述は中東を専門とする研究者にとっても読みごたえのある内容となっている。巻末の「新生リビア政権の系譜」(372-373頁)は政権崩壊後の複雑な政治組織の流れや関係性が分かりやすく図式化されているが、これは専門的知識を持ち、優れた伝達力を持つからこそ可能となったものであると考える。

本書はエスノグラフィーとしても一定の価値があると思料する。リビアに関しては邦文文献が少ないだけでなく、内戦状態にある現在はもちろん、カッザーフィー政権下でも日本人が簡単に入国できる国ではなかった。実際、評者は編者に研究指導を仰いでいた大学院生のときに、編著者ご夫妻のお招きでリビアに渡航したことがあるが、事前の手続きはこれまで訪問した20ヵ国以上の国々のな

かでも群を抜いて煩雑で、時間もかかった。中東研究者にとってすら渡航からして困難な国であるため、一般の日本人が現地を訪れ、市井の人々の生活習慣や社会のありようを知ることは容易ではない。したがって、本書に描かれた現代リビアの人々の宗教実践、食文化、教育制度、女性の活躍、そして、外交の裏側に関する描写は、貴重な一次資料としての意味も持っていると考えられる。

最後に形式に関して若干の課題を指摘したい。本書は現在の内容でも十分満足がいくものだが、カッザーフィー政権崩壊については、第Ⅱ部と第Ⅶ部の一部が類似した内容だったため、第Ⅱ部はカッザーフィーの生い立ちや思想に、第Ⅶ部は政権崩壊にそれぞれ特化すれば、読者はよりスムーズに読み進められたのではないかと感じた。しかしながら、この指摘は本書のすばらしさを否定するものではない。

「アラブの春」後の中東諸国のなかでもリビアが極めて過酷な状況にあることは知っていたが、本書を読み、それが想像していたよりもさらに厳しく、複雑であることを知り、愕然とした。その一方で、かつて目にした青空のもとに広がる穏やかなトリポリの街並みが頭のなかいっぱいになり、懐かしく、温かな気持ちにもなった。人々が安心して暮らせるよう、1 日も早くリビアに平和が訪れることを強く願う。

---

## 注

<sup>1</sup> 2010 年末以降の中東諸国における民衆運動に対して欧米のメディアがつけた「アラブの春」という名称はアラブ諸国でも使われているが、実際には反発を覚える中東出身者や中東研究者も多い。現実には「春」が意味するような穏やかな変動ではなかったこと、民主化への希求という欧米諸国が定めた 1 つの基準でしか事態をみておらず、実際にはさまざまな集団からの多様な要求が含まれていたことを捨象していることなどがその理由として挙げられる（長沢栄治「中東近代史のもう 1 つの見方—アラブ革命の 5 年を振り返って」後藤晃・長沢栄治編著『現代中東を読み解く：アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』明石書店、2016 年、29-31 頁）。中東に住む評者の友人知人の多くも、「アラブの春」を用いる代わりに「革命」を意味する「サウラ, *thawra*」というアラビア語を用いる。本書では「アラブの春」という名称についての説明はとくにないが、初出の際に「いわゆる『アラブの春』」（3 頁）とされており、その後も一貫して括弧付きの表記がなされている。このことから、著者たちが「アラブの春」という名称を無批判に用いているわけではないことが伺える。